

すばらしき“みえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2025.2

244号

■特集／実は開運?! 三重の閻魔様

●いま、グループネット／伊賀隠史サイエンス舎 夏見雅楽会 ●みえを歩こう／津市 美杉町下之川周辺



実は開運?! 三重の閻魔様

冠を被り、中国の官人風の服を身にまとい、怒りの表情でにらみつける…。

私たちが思い描く閻魔様の姿は、どこか恐ろしく近寄りた存在です。幼いころに、嘘をつくと閻魔様に舌を抜かれるよといわれた方もいるのではないのでしょうか。古代のインド神話のヤマ神を起源とする閻魔は、仏教に取り入れられて死後の世界の支配者になったとされます。その後、中国において道教の冥界思想の影響を受け、死者の生前の罪を裁く裁判官、閻魔大王となりました。やがて、閻魔大王が地獄で救いの手を差し伸べるという地藏菩薩の化身であるという信仰が普及し、日本でも広く受け入れられるようになりました。

今回は、三重県内に祀られている閻魔様を中心に紹介します。

*えんまの漢字表記は、閻魔・焰魔・夜魔などがありますが、今回は閻魔で統一しています。

*各寺社内の閻魔堂および閻魔像などに関する拝観日時や受け入れ人数・受け入れ方法などには違いがあり、状況に応じて延期や休止の場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文：中村真由美・中村元美・堀口裕世
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭・中村元美
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

地域の人が守り伝えてきた「えんまさん」の話

猪名部神社

【買弁郡東員町北大社】

4月の第1土・日曜日、猪名部神社では春の大祭「大社祭」が行われます。祭りのハイライトは、人馬一体となつて土壁を駆け上がる「上げ馬神事」でしたが、最近では神社周辺を練り歩く「馬曳き神事」へと様変わりしています。

「内容は変わりましたが、神事を始める前には、今でも必ず『閻魔堂』などにお参りしています」と教えてくれるのは、宮司の石垣光磨さん。お話の「閻魔堂」は、境内奥に「薬師堂」「毘沙門堂」とともに並び建っていました。普段はガラス



「馬曳き神事」※



左手前から「薬師堂」「閻魔堂」「毘沙門堂」



閻魔像の左右に整然と並ぶ十王像など



越しの参拝となりますが、この日は、ご厚意で堂内に入ると、中央の高い位置に堂々とした姿の閻魔像、左右には高さ40から50センチメートル程度の十王像などが並んでいます。



宮司の石垣光磨さん※

十王とは、死後の世界にあって死者の罪を順番に裁く10人の王のこと。たとえば、初七日を司るのは秦広王、二十七日は初江王と続き、閻魔大王は五七日、10人目の五道転輪王は3回忌の裁判を担当します。こうした十王信

仰は、中国の唐時代末期に成立したといわれ、日本では中世以降に死者への追善供養とも結びつき、民間にまで普及しました。やがて、十王それぞれに本地仏も定められます。本地仏とは、仏が人々を救済するために仮の姿を借りて現れるという説に基づいたもので、閻魔大王の場合は、地藏菩薩が本地仏とされました。なお、堂内には十王像に加えて、葬頭河(三途の川)で死者の衣服を剥ぎ取る葬頭河婆(奪衣婆)や、冥界の役人である五道冥官も揃っています。それぞれに表情も豊かで、親しみやすさを感じます。各像の制作年などは不明ですが、『東員町史』では「北大社のえんまさんの話」として紹介され、「800年も1000年も前から守ってきたのです」と綴られています。「えんまさん」は、地域の人々の心の拠り所として、今後も大切に守られていくでしょう。

お問い合わせ

猪名部神社

TEL 0594-76-2424

※印の写真は取材先から提供していただきました

秘仏の閻魔様と「赤えんま様」が導く、「えんまの寺」

【鈴鹿市神戸】



秘仏の閻魔様



「赤えんま様」

旧伊勢街道の宿場町であると同時に、神戸城の城下町として賑わった鈴鹿市神戸には、「えんまの寺」と称される古刹があります。金井山林光寺です。

天平12(740)年、聖武天皇の勅願所として開創されたと伝わる林光寺は、江戸時代には神戸城主・本多氏の祈願所として栄えました。本尊は、平安時代後期

作の木造千手観音立像(国指定重要文化財)ですが、秘仏のため、開帳は年に1回のみ。毎年、8月9日の夜10時30分から10日の午前1時までとなっております。この林光寺に「閻魔堂」が創建されたのは、南北朝時代後期(1300年代後期)のころ。身寄りのない死者や、病没した遊女、水子など不幸な人々を供養するために建立されました。祀られている閻魔像は2体で、その内の1体は秘仏のため、拝観できるのは「えんま会式」が執り行われる2月16日と8月16日の2日間のみになっています。



「閻魔堂」外観



住職の内田 景康さん

住職の内田 景康さんの案内で、まずは本堂に入ると、華麗な色彩と精緻な彫

刻の数々に目を奪われました。「現世(現在の世)」を表現しているのです」と教わります。これまでに多くの人々が厄除け開運、病氣平癒などの現世利益を祈願してきたことでしょう。



極彩色に彩られた本堂内部

男性ほどの大きさがあり、迫力十分。顔は赤く、眉をひそめて口を大きく開けているため、一見すると激しく怒っているようですが、しばらく眺めているうちに、慈愛の心を秘めているようにも見えました。「赤えんま様」の通称で親しまれているのも頷けます。また、奪衣婆像の大きな丸い目からも、優しさが伝わりました。

本尊が納められている厨子に手を合わせた後は、「閻魔堂」へ向かいます。堂内の中央には青く彩色された厨子、左側には閻魔像、右側には奪衣婆像が並んでいました。左側の閻魔像は大柄な成人



奪衣婆像



秘仏の閻魔像が納められた厨子

青い厨子の前には、丸い鏡が置かれていました。これは、死者の生前における善悪の所業を映し出すという「浄玻璃の鏡」です。また、左右には、閻魔大王の従者とされる司命像と司録像が厨子を守るように控えています。この日は特別に扉を開けていただきました。秘仏の閻魔像は、身に着けている冠や衣服の色彩がほとんど褪せることなく、肌の色も人間に近いため、今にも動きだしそうです。住職によれば、子どもたちは「赤えんま様」より怖いというとのことですが、その感想も納得できました。それでも、地藏菩薩の化身という思いで改めて手を合わせていると、叱咤激励されているようにも感じました。

「えんまの寺」の閻魔様たちは、これからも人々の心を励まし、導いてくれるでしょう。

お問い合わせ

金井山林光寺
TEL 059-3822-0610
拝観時間 8時~17時

津のまちを守る大きな黒い閻魔像

阿古木山真教寺

【津市下弁財町】



閻魔王座像

真教寺の閻魔堂は、津市の阿漕浦に近い「津興」と呼ばれた地域にあります。この地は、津の城下町が形成される以前、港町として栄えた阿濃津の中心地であった場所で、城下に中心が移動した江戸時代以降は、伊勢街道の宿場町への入

り口としてにぎわいました。藤堂藩の二代藩主・高次公(1602～1676)が、津のまちの守りとして、閻魔大王をご本尊とする真教寺を建立されたといわれます。それ以来の長い年月、この閻魔像は行きかう旅人を守り、地元の人々

に敬愛されてきました。お堂の前にあるバス停の名も「エンマ堂前」となっていて、長い歴史と人々との深いつながりがしのべれます。

お堂の中央で黒光りする閻魔座像は、見上げる大きさ。大きく見開いた目にも力のある憤怒の形相です。左右に従えた脇侍の俱生神・閻黒童子も生き生きとした表情や躍動感のある姿勢など、迫力のある表現がされています。この3体の像は、胎内にあった書付によって、天和2(1682)年、京都七条仏所の仏師・作左衛門・伝内の作ということが分かっています。津のまちには、閻魔像の首は、高次公が朝鮮出兵の際に持ち帰った



俱生神半跏像



閻黒童子半跏像

関羽(中国の三国時代の武将)あるいは子路(中国の春秋時代の人。孔子の弟子で武勇に優れた)の像のものと、この伝説が残っているということです。ほかにも、閻魔像の前には、懸衣嫗の像や罪の重さをはかる天秤などが並び、死者を裁く様子が再現されています。

閻魔像の右に並ぶのは、阿弥陀如来の坐像で、こちらは穏やかなお顔。木造で箔が施されていますが、藤堂家ゆかりの仏像という以外に詳細は伝わっていません。その作風から平安時代後期の作と考えられています。

また、左側にあるのは、円空(1632



阿弥陀如来坐像

1695)作と伝わる十一面観音立像です。高さ約236センチのすらりとした立ち姿で、円空初期の力作と言われています。粗い鈍目の小さな像が多い円空仏の中で、この像は大きく、鈍はつりという彫法で作られた優美な姿。飛鳥時代の仏像の影響を受けているといわれ、お顔もほのかに笑みを含んだアルカイツク・スマイル。台座から頭部まで一本のヒノキでつくられているということです。閻魔像と十一面観音像は三重県の有形文化財に、阿弥陀如来像は津市の有形文化財に指定されています。

現在は、津市乙部にある妙雲寺の松浦



円空作といわれる十一面観音立像

実昭住職がこのお寺の住職を兼務されています。「父がこの住職でしたので、引き継ぎました」とのこと。二代にわたりこのお堂を守っておられます。



住職の松浦 実昭さん

お問い合わせ

阿古木山 真教寺
TEL 090-2770-8516
松浦 実昭住職



閻魔堂



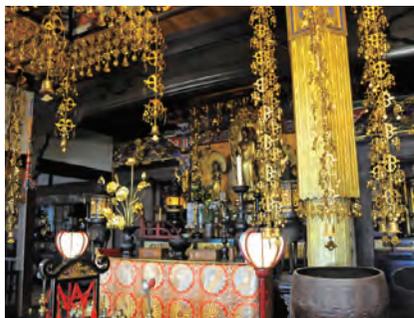
閻魔堂



先代住職が建てた碑



本堂は江戸時代前期の建築



きらびやかな本堂内



住職の小泉 友範さん

「この閻魔堂も閻魔像も、どの時代に誰によって造られたかなど、詳しいことは

い、味のある表情です。閻魔堂の横には、天明5(1785)年に立てられたという仏足石があります。その隣にある山門を入ると、手入れの行き届いた境内の正面に本堂があり、左手に立つ縁起を記した碑や句碑の奥は墓地へと続いています。

伝わっていないのです」と話してください。友範さん(18代目)の住職である小泉友範さん(祖父の代からこのお寺を守っておられます)。信楽寺の縁起は古く、天平時代にさかのぼるそうです。第45代聖武天皇の勅命により神宮へ仏舍利を奉納した際、この地域に日照山保延寺という寺院を建て、ここにも仏舍利を納めました。この保延寺は伽藍の立ち並ぶ大寺でしたが、戦国時代に焼失し、ただ一つ、念仏堂だけが焼け残ったといわれています。永盛という僧がこのお堂にこもって終夜念仏し

たところ、光明の射す焦土の中から仏舍利五輪塔を発見し、再興したのがこの信楽寺であると、第9世真承上人という方の板木にあるそうです。現在の本堂は、寛永20(1643)年に再建されたもので、閻魔堂や閻魔像も同じころのものだろうと考えられているのです。長い歴史を持つ古刹で、街道沿いの閻魔像は、ずっと地元の人々の信仰を集めつつ、にらみを利かせてきたのです。

お問い合わせ

普照山 信楽寺
TEL 05998-232844



怖いけれど親しみ深い赤い閻魔様
普照山 信楽寺

【松阪市垣鼻町】

閻魔大王座像

松阪市垣鼻町。名古須川に架かる小さな石橋のたもとに数基の石灯籠が並び、カーブを描く道や家並みの様子にも旧伊勢街道の面影がしのばれます。この道に面して、信楽寺の閻魔堂があります。格子越しにのぞき込むと、つややかな朱赤の顔をした大きな閻魔様が見下ろしています。そのお顔は、迫力に満ちて怖いけれど、どこか少しユーモラス。親しみ深い表情です。お顔だけではなく、胸に龍が描かれた道服なども、色鮮やかなまま残っています。

閻魔像の左右には、筆を持った書記役の司命と司録と思われる像が立っています。そして、その前には、三途の川で死者の衣服をはぎ取って木の枝に掛け、その重みで罪の軽重を量るという奪衣婆や、閻魔の本地仏とされる地藏菩薩など、閻魔にかかわる像が並びます。台のようなものに二つの頭部が載っているのは、人頭杖または壇拵と呼ばれる、一方の首は死者が生前に行った悪事を、他方は善行を知っていて、裁きの際にそれを語るとのこと。死後の世界で、人間の生前の行いを裁く恐ろしい場面なのですが、閻魔大王の像と同じように、眷属たちもいかめしい中にもどこかかわい



仏足石

平野山 常住寺

【伊賀市長田】

弁柄塗りが美しい閻魔堂は県指定の有形文化財



入母屋造の本瓦葺きの閻魔堂

石段を上がった境内で振り返ると、広々とした田園とその先には伊賀上野城。すばらしい眺望の丘陵に建つ常住寺は、室町時代にすでにその存在が広く知られていました。人々の信仰を集めた寺の閻魔像が、天正20(1592)年に奈良市の元興寺極楽坊で開帳されたと伝わり(『多聞院日記』、近世には江戸でも開帳の機会がありました。かつては「琰王寺」と呼ばれ、境内には伊勢津藩の初代藩主・藤堂高虎の妻、松寿院の供養塔(市指定文化財)があり、ここは藤堂家にとって

特別な地であったことがわかります。弁柄塗りの赤い外壁が目を引く閻魔堂は、慶長7(1602)年に筒井定次が母の三十三回忌の際に建立したものを、万治3(1660)年に藤堂藩の2代藩主の藤堂高次が、母松寿院、つまり高虎の側室の十三回忌に合わせて再建したものです。その後、元禄3(1690)年、享保15(1730)年、明和8(1771)年、安政3(1856)年のすべて、時の藩主により城代家老以下、藩の重役を奉行として修復が加えられ、長年大切に守られてきました。

その建物は入母屋造の平入り、本瓦葺きで、正面には張り出した向拝を付け、四周に縁を廻らせています。柱の上の組物は出三斗、中備は墓股、軒は二軒繁垂木という一つひとつに見応えのある構造で、平成8(1996)年、県の有形文化財に指定されています。

堂内は閻魔像が納められた厨子を安置する内陣と、礼拝する外陣からなっていて、中央の二天柱、須弥壇厨子などは

極彩色で華やか。内陣の格天井、外陣の竿縁天井がその空間をはっきりと区別しています。

「秘仏のご本尊さんは、一寸八分で5センチほどの大きさです。持仏として持ち歩いたのでしょう。厨子は外、中、奥と三重に置かれていて、外厨子内側の壁面に千体阿弥陀仏が祀られています」と寺の住職の森喜良さん。黒漆の中厨子の内面には極彩色で描かれた十王図が掛かり、奥厨子に木造閻魔坐像が安置されています。これらも県指定の文化財となっています。



内陣の華やかな造りを前に拝礼



外厨子内側に祀る千体阿弥陀仏



境内の松寿院の供養塔(一番右)



正面に伊賀上野城を眺める

常住寺の縁起は、天台宗の僧、尊恵上人が伊勢参宮からの帰路、このあたりに閻魔王を祀ったのが始まりと伝えられています。尊恵上人は承安2(1172)年、閻魔王の使者に誘われ閻魔の庁へ赴き、閻魔王像を持ち帰ったとされる僧です。「亡くなって五七日の日(35日)に、みなさんお詣りに来られます。極楽への分かれ道です。延寿、除災、除病、追福、それと閻魔さんの本地が地藏菩薩なので安産祈願も盛んでした。お供えはこんにゃく。一度茹でると冷めるのが遅いので、女の人が腰を冷やさないように

と願ったのでしょう。また1月16日と8月16日は、閻魔の大賽日にあたり、数入りとって閻魔堂へのお詣りで賑わったようです。「正月に里帰りしても16日までは帰らず、親の供養をするために閻魔さんにお勤めしたようです。今はしきたりが薄まってきてますけどね」と森住職。死者救済を願うために信仰されてきた閻魔堂をお詣りすれば、伊賀の歴史も垣間見れるでしょう。

お問い合わせ

平野山 常住寺
TEL 0595 123 1594

丹生山 神宮寺

弘法大師の師、勤操大徳が開かれた寺の閻魔堂

【多気郡多気町丹生】



色鮮やかな閻魔王天を含む十王が安置される

人禁制であったのに対し、神宮寺は女性の参詣が許されていたので、「女人高野」とも呼ばれ、多くの信者を集めてきました。

宝亀5(774)年に弘法大師の師である勤操大徳が開山、後の弘仁4(813)年に弘法大師が伊勢神宮参拝の途中にこの地を訪れ、来寺されたとき、師が開山された寺院である事に感激し、七堂伽藍(不動堂・鐘楼堂・閻魔堂・地藏堂・観音堂・薬師堂・大師堂)を建立、整備されたという由緒あるお寺です。

その七堂伽藍の一つである閻魔堂(十王堂)は、長い参道で白壁が際立つ蔵のような建物で、明和8(1771)年に再建されています。安置されるのは赤い顔をした色鮮やかな閻魔王(閻魔天)



白壁が際立つ閻魔堂

を含む十王。正面の格子窓から中の様子を覗くことができます。

三途の河で出迎える奪衣婆、生前の罪の裁きの場でその判決を読み上げ、命令を記す司命・司録、人の行いを監視する人頭嚙、赤鬼、青鬼が閻魔王の周りに勢揃いし、中でも憤怒の形相で恫喝する閻魔王の存在感は圧巻。裁きを下す王としての威厳があふれています。「丹生出身で四日市在住の方が県内外の閻魔王をいろいろ調べて資料を送ってください、このように大きく立派で十王が揃っているのは珍しいと伺いました」と寺の住職・岡本 祐範さん。

四季を通じて美しい景色が広がる境

地元の人々に、丹生のお大師さんとして親しまれている丹生山 神宮寺。真言宗の総本山である高野山が、かつて女

内を歩き、隅々までお詣りしました。大師堂へと続く石階段横には、回廊が設けられています。これは平成29(2017)年の台風で倒壊した後に再建されたもの。かつては高貴な方が雨風を凌ぎ、また敵から身を守るために作られたようですが、現在は参拝者も利用できるように解放されています。

大師堂のご本尊は弘法大師像で、これは大師が42歳のときの自画像と伝わり、寺院内の池に写された姿を「衆生の厄除と未来結縁」のためにと自らが刻み安置されたものだといわれています。大師堂隣には四国八十八ヶ所の石仏が並び、その裏手に鳥居が見えます。ここには弘法大師の守護神である丹生都比売を



大師堂へと続く回廊

祀ります。前を通ってさらに進んで行くくと、境内の一番高い所に火伏せの神、愛宕大権現の祠があり、丹生大師の伽藍を一望する景色が広がっています。石階段を降りて戻り、観音堂へ。伊勢西国三十三所観音霊場の第十二番として、ご本尊である十一面観世音菩薩を祀ります。その奥には丹生神社が見えます。その社殿は伊勢神宮の式年遷宮の際に古い社殿を譲り受けたものです。明治の廃仏毀釈によって寺と神社は別々になりましたが、神宮寺にはそれ以前の神仏習合の時代が色濃く残されています。

古くから水銀の産出地として栄えた丹生は、今でも格子戸や土塀などの風情ある町並みや由緒ある寺院も残り、丹生大師の門前として旅人をもてなしてきました。

和歌山別街道に面した寺の大きな山門(仁王門)は、修復を終えて令和元年に落慶されました。街道側に二体の仁王像、境内側には持国天、增長天の二天が安置され、寺と門前町を見守っています。

お問い合わせ

丹生山 神宮寺
TEL 0598-49-3001



弘法大師像を祀る大師堂



神宮寺に隣接する丹生神社



街道に面した立派な山門

伊賀隠史サイエンス舎 夏見雅楽会

名張川右岸の丘陵斜面にある夏見廃寺は、出土遺物により7世紀末から8世紀前半に建立されたと推定されています。その廃寺跡より出土した博仏に描かれている楽器の復元演奏を目標として、平成23(2011)年に「伊賀隠史サイエンス舎」を母体とした「夏見雅楽会」が発足。月に一度、雅楽の練習を重ね、演奏会を開いています。



雅楽用の譜本

お問い合わせ

「伊賀隠史サイエンス舎
夏見雅楽会」
TEL 090-3383-0966

「伊賀隠史サイエンス舎 夏見雅楽会」は、名張市民センターのサークル活動の一つとして、笙、箏、龍笛を練習しています。演奏を楽しむだけでなく、日本古来の文化や精神に触れることのできる雅楽器。その魅力について世話人の富田 廣さん、メンバーの肥後 和代さん、尾上 佐登美さんにお話を伺いました。

— それぞれの雅楽器の特徴と、はじめたきっかけを教えてください。

尾上：龍笛は7つの指穴がある横笛で2オクターブの音域を持っています。唄口も指穴も大きく、指全体でしっかり押さえて吹かないと思った通りの音が

出せず、そこが難しいのですが、うまく吹けると遠くまでよく通るししっかりした高音で、その美しい音色にはまりました。名前が示すように天と地の間を行き交う「龍の鳴き声」を表しているときられています。曲の立ち上がりや左右し、全体をまとめる役割もあるため、技量が身につくよう練習あるのみです。

肥後：笙は吹口に息を入れると、竹に付いているリードが振動して音となります。吹いても吸っても音が出るのが特徴で、高さの異なる音を一度に鳴らすことができます。指孔を5〜6つ同時に押さえて、「合竹」という奏法で音を響かせますが、吹き方によって1オクターブ変わります。音色は「天から差し込む

光」を表すとされ世の中にこんなきれいな音があるのかと習い始めました。笙は吹く前後に温める必要があったり、箏のリードはお茶などの熱い液体につけて、開かせるといふ手順が必要だったり、雅楽器は扱い方にも特徴があります。富田：箏は竹の筒に蘆を削って作ったリードを差し込み、そのリードから息を吹き入れて音を出す縦笛です。主に主旋律を担当する楽器で音域は狭く、「人の声」つまり「地上の音」を表すとされています。これらの雅楽器を合奏することが、基本の表現となります。

— 独特な音色が重なり合うことで魅力が増すんですね。

富田：雅楽は日本独自の音楽であり、

「越天楽」や「陪臚」など、神社仏閣や結婚式場などで耳にする機会もあるでしょう。肥後：指揮者がいませんので、その時々で音はナマモノです。周りと速さがずれてしまわないように、お互いに気を付けています。

尾上：公民館での発表会のほか、宇流富志禰神社のお祭りなどで披露することもあります。それに仲間たちと斑鳩法隆寺などの演奏会に出掛けたりしています。

— 活動の母体は「伊賀隠史サイエンス舎」と聞きました。



世話人 富田 廣さん(右)
肥後 和代さん(左)、尾上 佐登美さん(中)



雅な音を響かせる



龍笛(左)と笙



斑鳩雅楽会と共演した演奏会*

富田：平成18(2006)年4月に設立された組織で、国指定史跡夏見廃寺の研究を軸に、具体的には7世紀初頭〜8世紀にかけて「名壱横河」といわれた畿内東限が、飛鳥・藤原京の強固な防塞であったことや神仏の国家鎮護の拠点であったことの解明をしてきました。紀行作家の玉城 妙子先生を講師に、現場に出てフィールドワークも重ね、また吉野を出発して名張までを10回ほどに分けて歩き、臚げながら当時のことがわかってきました。

夏見廃寺展示館に金堂を飾ったとき

れる博仏があり、そこに楽器を弾く人、獅子などが表されています。「夏見雅楽会」は、それがどんな楽器か、材質は何かと疑問をもち、楽器を復元して演奏したいという想いで、天理大学雅楽部の総監督・佐藤 浩司さんを講師に迎えて立ち上げました。竹が何本か集まった楽器の復元に、お子さんも交えてワークショップをしたこともあります。

— 地元名張で、壬申の乱ゆかりの地の探索の成果をまちづくりの活かし、雅楽で日本の伝統音楽と地域の歴史を広めています。

インタビュー：中村 元美

*印の写真は取材先から提供していただきました



みえを歩こう

森林セラピーで五感を開いてリラックス

津市 しのがわ

美杉町下之川周辺

森林セラピーとは、森林浴の癒し効果を科学的なエビデンスに基づいて心身の健康に活かそうという試みです。平成17(2005)年、林野庁は「森林セラピー基地構想」を発表し、翌年から森林浴効果があると認定された森林やウォーキングロードを持つ地域を「森林セラピー基地」として認定しました。現在全国に63か所認定され、津市美杉町もその一つ。今回は、「津市森林セラピー基地運営協議会」の森林セラピスト、中林カオルさんと峯野都史子さんのガイドで、美杉町に12あるコースの中から下之川の「塚原ヒストリーコース」を歩きました。自然の中でゆったりと五感を開く癒しのウォーキングです。

取材・文：堀口裕世

落ち葉の感触にドキッ

スタートは「下之川住民交流センター」。まずは、すぐ近くの仲山神社に向かいます。鳥居をくぐって石段を上り、境内へ。「ここは、ごんぼ祭り^{ゴンボ}で知られる神社です。杉の巨木がたくさんあるのでしよう。この木の幹に触ってみてください」と中林さん。木に触れてみるとほのかに温かく、予想とは違う乾いた感触に驚きます。続いて峯野さんが「ここを歩いてみてください」と、積もった落ち葉へと誘います。落ち葉のじゅうたんに踏み込むと、思わず「わっ」と声が出るほど柔らかく深さがあります。そして、足にぬくもりが伝わってきます。「私たちは、自然の中でいろいろな感覚を味わっていただけるような案内をします。五感を開いて、普段の生活とは違う感覚を楽しんでいただきたいのです」「雄弁に観光案内をするわけではなく、リラックスのための手助けをするのです」とお二人。最初の立ち寄り先で、すでに五感が動き始めています。

緑に包まれた道をゆっくり

脇の坂道を下りて、せせらぎの音を伴奏にゆっくり歩きます。「風の音や風景

などを楽しみながら歩いてください。次にめざすのは、フジバカマの群生地。渡りをする蝶、アサギマダラのために栽培しているのです。取材時は、蝶は渡り終えた後で出合えませんでした。咲き残った花からほのかな香りが漂い、嗅覚も目覚めてきたようです。旧下之川小学校体育館の周囲をぐるりと回って、八手俣川に架かる竹鼻橋を渡ります。緑に包まれ、水音や川風が体を通り抜けてゆくようです。川を渡ると県道43号を右へ。民家の多い地域に入っていきます。ここで一軒の古民家に案内されました。東京から移住して来た西原千枝子さん



「下之川住民交流センター」
温浴施設もある



仲山神社



フジバカマの群生地



竹鼻橋から川下を見る



「梅庵」は懐かしいたずまい



中林カオルさん 峯野都史子さん
歴史や自然、地域の現状にも詳しいお二人。細やかな心配りでガイドしていただきました。





塚原ト伝の屋敷跡



「ヒストリーパーク塚原オートキャンプ場」



苔の上で深呼吸

らっているのです。お弁当も、この土地で採れた素材を使い、あたたかいうちに食べられるように届けてもらいました」と北條さん。北條さん手作りの窯で焼いたピザやコーヒーもいただいで、身も心もあたたまるランチタイムです。昼食を終え、山へ。道は舗装され自動車を通れる幅ですが、交通量が少ないので、中央には苔が生えています。中林さんの「苔の上を歩いてみてください。クッションになり足が疲れませんが、葉通り、ほんの少しの苔なのに足裏に柔らかく、楽に坂が上れます。

しばらく上っていくと、室町後期の刺客、塚原ト伝の屋敷跡という案内板のある場所に出ました。屋敷跡には、井戸の痕跡を残すのみですが、ここでどんな暮らしが営まれていたのだろうか、想いがめぐります。中世の武士の遺跡に別れを告げ、さらに上ります。風に揺れる木々の音や小鳥の声に耳を澄ませ、森の香りを楽しみながらゆっくり歩きます。

苔の柔らかさにうつろ

ヒノキの林を抜けると分かれ道があり、左の下る道へ。道幅が広くなり、「ヒ



アンティークがおしゃれな「梅庵」の室内



庇のように岩がせり出した「石御堂巖」



かわいい3つの石仏が



「九庵」の前庭は楽しいものがいっぱい



地元の幸を活かしたお弁当とピザ

が営む宿泊施設「梅庵」です。「この宿とカフェと住居と、3軒の古民家で楽しんでいます」とこやかな西原さん。アンティークの店を経営していた西原さんならではのセンスで古民家がおしゃれに変身。蔵を利用したベッドルームなど、非日常な感覚になれると好評とのこと。北條さんは「森林だけではなく、この地域の暮らしや人々の活動も見たいので、こういう場所にもご案内しています」と話します。

さらに進むと、切り立った巨大な岩「石御堂巖」が現れます。庇のようにせり出し、その下の板垣の中には、三面六臂のかわいい庚申さんなど小さな3つの石仏がお祀りされています。切り立った岩の上部には摩崖仏があるのですが、この日は植物に隠れて見ることができませんでした。

温かいランチと剣豪の伝説

再び川を渡り、スタート地点に戻って届けてもらったお弁当をピックアップ。続いて県道43号を渡り、山に向かう道を進みます。坂を上って行くと、左手の古民家に「アトリエ九庵」の表示があり、迎えてくださったのは北條 九一 郎さん。「私も奈良から移住してきたのです。こ



カラフルな北條さんの絵画

こで日々絵を描いています」と悠々自適な様子。「九庵さんの前庭でお昼にしたいとお願いしてあります。この地域を楽しんでもらえるよう、地元のみならず、まな方にお声がけして力を貸しても

ストリーパーク塚原オートキャンプ場」を抜けていきます。手入の行き届いたキャンプ場です。この出口付近に、お二人がヨガマットを準備してくれていました。「このふかふかの苔の上に寝て深呼吸してみてください」。横になってみると、苔の柔らかさが背中に心地よく、木洩れ日や苔の香り、せせらぎの音などのすべてが、体の中の疲れを流し去って行くようで、眠りに落ちてしまいたいそうです。「眠る方も多いですよ。リラックスすることが目的です」と北條さん。爽快な気分を味わって、ゴールへ。ここで二人手作りのお菓子と温かいお茶をいただき、幸福な気分を歩きました。自然の中で五感を開放しながら歩く、森林セラピー。参加するには、ホームページの年間スケジュールなどを参照の上、予約が必要です。食事なども申し込み時に確認してください。

問 津市森林セラピー基地運営協議会
(津市美杉総合支所地域振興課内)
TEL 059-272-8082

守りたい、いのち 三重県指定希少野生動植物種

絶滅のおそれのある動植物種のうち、特に保護する必要がある種で、
三重県指定希少野生動植物種として指定している野生動植物を紹介します。



ヒメタイコウチ

昆虫綱カメムシ目タイコウチ科

◆ 分布 ◆
北勢

本州の静岡県から兵庫県、四国の香川県に分布する。体長20mm内外で、尾端に3mmほどの呼吸器官を持つ。産卵期は4~6月で5齢を経て8~9月頃に成虫になる。寿命は約2年。

資料・写真提供：三重県 農林水産部 みどり共生推進課 野生生物班

■ お問い合わせ

三重県 農林水産部 みどり共生推進課 野生生物班

TEL:059-224-2578 メールアドレス:midori@pref.mie.lg.jp

*三重県指定希少野生動植物種を県ホームページに準じて紹介しています。

*県ホームページで他の野生動植物種をご覧になれます。

表紙写真 「阿漕山 真教寺」(津市下弁財町)

百五銀行のホームページで、「すばらしき"みえ"」のバックナンバーをご覧いただけます。
<https://www.hyakugo.co.jp/mie/>